

〔國牛十圖〕あらたなりこ、に馬は東關をもちてさきとし、牛は西國を以てもと、すはかりしんぬ、陰陽の精靈たるによりて、名をふたつの境にえたりといふことを、事すこしきなりといへども、あへて此ことよりはりをわきまふるもの、まれらなるものか、但馬は賢哲のをしへかたぐ、あきらかに、牛は蕪蕪のうたがひなをのこるところなり、王侯將相これをもてあそび、黎民匹夫これをたのしむによりて、五畿七道より京洛にあつまる事蟻のごとし、其うち皮肉筋骨に付て、彼所生の國あらはなること、ま、み及ぶ所わづかに十ヶ國、見んものさとりやすからむがため、其形體をしるして、十圖と名づく、もとより管見のいたりなれば、十に八九はあやまる事おほかるべしといへども、をのづからかなふところあらば、又その要なかるべきにあらず、これたゞ志のゆくにまかす、後見のあざけりかねて思ひまうくるものなり、

筑紫牛。以壹岐島牛稱之

その形めうしがほにて角さき細く、耳じるしをきる、くびきの下すこしうすく、骨ほそく皮うすく、完すくなう筋あらはに毛みじかく、すべて其姿うつくしく、えだづめ堅く、年おふまで、つまもとさはやかなり、印以下同、まぢくなり、

上古より上牛、駿牛これにおほかりけるに、ひと世異賦此島にをそひ來て、かすをつくして、いけにへにもちひけるによりて、ながころまれになりたりしが、いまはもとのごとくいでき

○にたりとかや、
○圖略以下同

御厨牛。以肥前國字野御厨眞牛稱之

角ながく、骨ふとく、皮実あつく、えだふとく、おはかた牛大きなり、中古の名牛おほくこれにあり、印大文字に鞞繪自故今出川入道太政大臣家被下此印云々、或云大文字にはあらず、散毬打に鞞繪といふと云々、淡路牛。

あたませばく、角さき上へはねて、実かたく、なか骨すぐに、みじかふとなり、凡せいちいさくして